

郷土摂津

いにしえ通信

第48号 平成14年4月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>第1回
淀川と摂津市

川と文化 人間の文明の発祥をみると、人間は水とは無関係では生存できませんでした。世界での文明をみると、必ず川の流域がその舞台となっています。エジプト文明にはナイル川が、インド文明にはインダス川が、そして中国文明には黄河の流れがというように、文明発祥の地は、必然のように、大河の恩恵に浴しています。かくして、淀川や大和川は近畿の文化を運ぶ道の役目もありました。

淀川の水運 淀川は古来から、瀬戸内海と琵琶湖をつなぐ重要な水路でした。この水路の一番の利用法は、船による運航でした。人間は船によって川を活用して生活を豊かにしてきました。

江戸時代になると、「天下の台所」である大坂には、「出船千艘・入船千艘」といわれま
すように、船が絶え間なく出入りしていました。

いろいろな所から運ばれてきた貨客は、川船によって回送されました。淀川水系には、過書船・伏見船など数十種にのぼる川船が貨客を運び賑わっていました。これらの川船は、いずれも幕府から特権的営業の認可を受けた船ばかりでした。幕府は、特権的営業を認可するとともに、船主には運上銀を課していました。諸船の管理は大坂町奉行に属していました。また、水上警察と税関の役割を果たすものとして大坂舟手が設けられ大坂の官舟を管掌して軍事・警備にあたるとともに、民間の諸船を監察していました。



藤森神社と淀川 江戸時代末頃の藤
杜（ふじのもり）神社として、鳥居
や川筋を行き交う人々が描かれてい
ます。手前が淀川です。

『淀川兩岸一覽・柳原書店』より

◎次号より淀川筋を航行していた多数
の船を紹介していきます。



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

投稿コーナー

平成13年度・ふるさと掇津講座を受講して

去年の6月から今年の3月まで全10回、楽しく受講させていただきました。玩具と掇津、綿と掇津、お茶と掇津など身近なテーマで意外と知らなかった掇津市との関わりに驚きの連続でした。

講師の方々も、古建築の研究家の方から初めて講演される市民の方まで色々で、みなさん熱心な講義で生き生きとした姿にうらやましくもありました。担当の職員の方が「一度講師をしてみませんか」と声をかけてくださり、今年は何かテーマを決めてチャレンジしてみようかなと思いました。これまで講座は聴くものとばかり思っていました。受講生が講師になる「ふるさと掇津講座」、これからも色々なテーマでたくさんの人の話を聴きたいものです。

千里丘三丁目在住 M・T



講座の聴講風景

6月からふるさと掇津講座を開催！

みなさまも講師に挑戦してみませんか！講座の詳細は次号にてお知らせします。

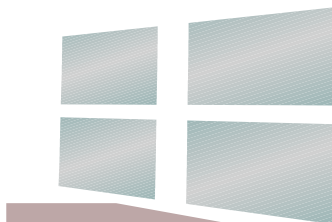
掇津市文化財講座「魏志倭人伝を読み解く」を受講して

今回の講座は、魏志倭人伝の舞台となった邪馬台国のことだけでなく、弥生時代の米づくりや銅鐸についてなど分かりやすく楽しい内容でした。講師の藤田先生は、たくさんの発掘現場を経験され、たくさんの方と情報交換されているようで、講座の内容は臨場感にあふれ、まさに古代史の最前線という印象でした。

講座のなかで、弥生時代は倭国大乱といわれる戦争に明け暮れた時代だったという説明がありました。日頃から昔の人たちは、何を考えて、どのように生活していたかなどに思いを馳せることがあります。めまぐるしい現代の世情から逃れる気持ちからか、古代はきっと平和でのどかな世界だったと想像しがちでした。しかし今回の講座を受講して少し気持ちが変わりました。いつの時代にも争い事があり、いろいろ悩みもあって、その時代なりに大変だったのだなと思いました。

掇津市では、弥生時代の土器などの発見はあっても、まだ集落跡は見つかってなく、今後の発掘調査に期待がもたれるとの事でした。掇津市では、戦争に明け暮れたような集落でなく、平和でのどかな田園風景が広がっている集落が見つかってほしいものです。

新在家在住 K・M



郷土史コーナー

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生(あじふ)の歴史

大阪金属工業の味生村への進出

市域住民は「銃後も戦場だ」との標語どおりに統制されて行きますが、この間の戦時経済の展開は本市域にも軍需工場の進出をうながすこととなりました。しかし、工場の建設は農地の消滅、小作人の耕地取り上げを意味しましたので、誘致問題が現実化するにつれ、農民の反発もみられ村政も動揺するようになりました。時あたかも食糧増産が時局の要請となりつつある時期でもあり、事態は複雑な様相を呈しました。その代表例が、「味生村工場開設奨励規定」を適用すべき大阪金属工業株式会社(現在、ダイキン工業株式会社)の新工場建設をめぐる問題でした。

昭和13年1月、陸海軍指定会社となった大阪金属工業は、もともと大阪市内と堺市内に工場を持っていましたが、事業拡張のため新工場建設用地を物色していました。ところが、味生村会協議会が誘致条件を掲示した大看板を村内街道筋に立てるほど積極的であることを知り、同13年10月頃から用地買収を開始しました。(「ダイキン工業淀川製作所史草稿」)

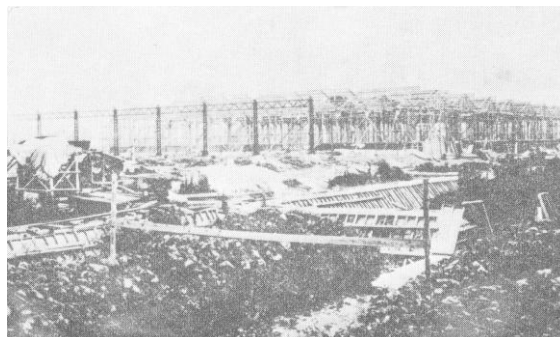
村会協議会はこれに対応して、12月11日「本村ニ於テモ相当ノ犠牲ヲ払ウノ義務アリ」として、(1)買収地への不動産取得税付加税の免除、(2)大字別府の村有地八反九畝二十一步(約8,896平方メートル)の無償提供、(3)工場敷地内の村道廃道敷の無償提供、(4)工場敷地内通過村道の村費による新設を議決しました。

30万坪(約99万平方メートル)の用地取得をめざす買収交渉は、一津屋地区では、好調な滑り出しで昭和14年1月にはほぼ成立しましたが、その後、地主と小作人の利害がからみ難航し、約20万坪の買収が完了したのは10月でした。しかも、建設工事を急ぐ会社側は、暗渠と地下道の建設を1月に開始し、6月、淀川工場建設委員を常置させ、青年学校施設建築を先頭に10月から本格的工事に着手しました。(つづく) 担当 (茗荷)



大阪金属工業淀川工場の建設風景

青年学校が優先着工され、すでに寄宿舍・実習工場・教室の一部が完成しています



暗渠・地下道工事

ダイキン工業淀川製作所提供

第13回

埋もれた
掇津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく掇津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成12年度
蜂前寺跡
2次調査

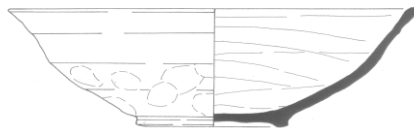
瓦器碗出土状況

◎溝1内の土坑104から、瓦器碗と小石が混ざった状況で見つかりました。瓦器碗は完全品ではなく、使用できなくなったものを埋納したようです。地鎮行為が想定される遺構です。

瓦器碗について 今回の発掘調査では、比較的多量の瓦器碗が見つかりました。瓦器碗とは古代以降の中世(とくに12世紀~14世紀)に畿内やその周辺地域で広く用いられた土器です。精良な粘土を用いて、内面をへら磨きし、いぶして焼いた土器です。器の中身は白色で外面は灰色、黒色を呈しています。この土器を出土する遺跡が多く先月号で説明しました土師器皿とおなじく年代観を計る資料となっています。

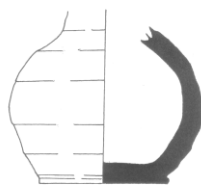
瓦器碗の研究実績は多く、中世における生産や流通のあり方を考察する上で重要な役割を担っています。斑鳩町法隆寺出土資料を中心に検討を加えた稲垣晋也氏は1961年に瓦器碗を13型式に分類し年代的な推移を想定、初めての体系的な編年を示しました。その中で瓦器工人から火鉢座への変化を想定しました。その結果、現在でも「瓦器碗=規格的な大量生産=商品流通」というイメージが強く存在しています。

中世は戦乱の中にあっても、水利技術、農業技術、手工業などが発展し民衆が生き生きと活躍する時代でもあります。そのような拡大する生産社会の中に瓦器碗も位置するのです。



土坑104出土・瓦器

最大径 15.3cm・器高 5.2 cm

土坑53出土
瓦質土器小壺最大計 6.9センチ
残存高 5.5センチ

瓦質土器小壺について 瓦器碗がつくられた頃、西日本を中心とした範囲で生活道具の中に新しい土器が出現します。瓦器同様、表面に炭素を付着させて瓦質に焼かれています。種類は壺・甕(かめ)・鍋・釜・播鉢(すりばち)などの日常道具、仏具・井戸杵・硯・花瓶などの特殊品が見られます。

今回の発掘調査では、この瓦質土器の小壺を検出しました。体部のみの残存でしたが、比較的丁寧に作られていて、仏壇にそなえる陶磁器や金属器の小壺を模倣した土器だと思われます。柱穴を抜き取った後に埋納した状況で検出されました。